

私の幼児教育論

喜田史郎

遊びを通して子どもは獲得するとい

われる。また、子どもは遊ばせなければいけないという。子どもにとって、遊びが全生活であるというのである。

遊びという言葉を使って幼児教育を論じていれば、すべて無難に通っていくからであろうか。そして、そのかぎりにおいて、幼児教育は、まことに楽しく、夢多き立場を堅持することができるとに相違ない。

しかし現実の子どもは、果して、遊びの世界だけにとどまっていられるのであろうか。遊んでいるだけで、大人の承認が得られるであろうかという問題

が生じてくる。

子どもはまず模倣する。そして、模倣させられる。生得的に模倣することのできる子どもに課せられるのは、まづ正しく模倣することである。うまくできないと、恐るべき反復強化を受けることになる。

ーアッチャーんー ……ハイ…

ーアッチャーんー ……ハイ…

なるほど、大人はこうして子どもと遊んでいる。よちよち歩きの幼児が、お返事をしたと大喜びする。うまく返事がかえってこない、親の他人に対する誇示要求が傷つけられるのである

うか。

ーオヤ、お返事は、アッチャーんー
恐るべき執念をもって、子どもに強要したりする。決った反応を求めめるかぎり、ここには子どもにとって、遊びはないことになりはしないであろうか。

遊びは、仕事と区別される。結果を問題にしないのが遊びである。結果だけを問題にするのが仕事である。したがって、遊びは評価の対象にならない。遊びの過程は、子どもの内的なものだからである。

ところが、遊び中心であるべき子どもの教育において、子どもはしばしば評価という社会的な圧力にさらされている。そして、大人は子どもを常に評価の目で見ながら、遊びを強調する。先生は、「遊ばせておけばいいんですよ」と説き、親は、「この子はおかしいので

はないか」と思いながら、ちゃんとやれるようにと、強圧を加える。先生も子どもに対して満足してはいない。いい先生であるほど悩み、自分を責めたりする。

正確な発音を要求される言語、逸脱・変調を許されない音楽リズム、完成しか認めない絵画製作。それでいて遊び中心だという。はっきりと、幼児教育は遊びだけではないといってしまうほどだけ楽になるだろうと思われるのに、遊びという言葉に固執する。

絵画をやり玉に上げてみよう。もし遊びだけでいいのなら、作品はでき上がらないはずである。絵具を使って、色水を作ることに専念しはじめても、遊びだからいいではないかということになる。画用紙に向かわずに、顔や机に描きはじめてもいいはずである。表

現の要求を画用紙にしか向けてはいけないというのは、大人の側の都合だけでしかない。

また、小学校教育と幼児教育が区別されるべきだとするならば、幼児の絵画作品が展示されるのは、根本的に間違っているといわなければならぬ。作品は結果であり、制作は、完成を意図する以上、仕事以外の何ものでもない。

さらに、園児に同じ課題で描かせて、それをいっせいに教室に展示するのは、一体何事であろうか。ごく少数は得意になる子どももいようが、多くの子どもたちは表現意欲をそがれてしまうに相違ない。上手下手が一目瞭然だからである。遠足の絵、運動会、父親参観日のための父親の顔。幼児教育者の加虐精神をそんな形で補償していると、親や子どもは被虐性の異常者ば

かりではあるまいから、これは大問題である。

音楽リズム、体育表現舞踊の類でも、発表会がある。“おたのしみ会”などと称しているが、音痴、遅鈍の子どもと親にとっては、“おくるしみ会”であろう。

もちろん、子どもに応じて、何かの役割を与えるべく、先生方も苦心してはいよう。しかし、発表会をピークとして盛り上げていこうとする先生方の努力は、遊び中心の幼児教育論から発したものであろうか。

三歳児は、間違えても「かわいい」と許される。五歳児は、しかし「オンチ」「トンマ」というレッテルをはられるために登場することになりかねないのである。

これでもなお、遊びといわなければいけないのであろうか。それでいて、

「今日のお仕事は……」という言葉を使う。「おべんきょう」が園児に対しては「タブー」になっているのである。何か「キンダーガルテン」を学校教育の汚濁から守らなければならない楽園としようとするあがきをすら感じるのであるが。

たしかに、園児の親は、「この子は、お友だちと遊べないで……」と心配する。そして、小学生の親は、遊んではかりいてと困っている。友だちと遊ばないでひとりで本を読んでいる幼児を、なぜ困った子と見るのであろうか。四、五、六、七歳と、子どもは連続過程をへていくのに、なぜ画然と区別されなければならぬのであろうか。また、六歳二カ月の園児と、六歳二カ月の小学生とが、なぜ違った扱いを受けなければならぬのであろうか。たかが制

度上の便宜として引かれた線が、どうして厳しい意味をもたなければならぬのであろうか。これは、大人の側の意図の問題である。伸び過ぎてもらっては困ると考える大人がどこかにいるのであろうか。小学校低学年の先生にも、先走る子どもを抑制しようとする人がいる。授業がやりにくいからあまり家で予習させないでくれと、母親が叱られたりする。いったい、教育を何と考えているのであろうか。意図的に設定された教育は、一定の形にそった盆栽（凡才）を作ろうとしているのであろうか。

近年、早期教育が提唱されたり、またその反論が展開されたりしている。提唱者は、早期に教育を開始すれば子どもはすべて英才となるようなことを説く。反対者は、無理じいが誤りであ

ると反論する。いずれも論拠はあるのであるが、これも大人の意図が先に立っている。視点を子どもにすれば、どちらでもいいのである。

ところが幼児教育となると、教育ではない、保育であるといわなければならない。保育は、保護育成であるから、教育ではないというのであろうか。さすがに、言葉の国である。漢字の字面にとらわれてばかりいる。

保育だから、文字は教えずにいいというのも、おかしいのではないだろうか。求めてくれば与えてもいいが、積極的に指導することはいけないという。園児に教えずに、小学校にはいつから学習すればよい。入学時には読み書きできなくても、三年生になればちゃんと追いついている。差が全くないのである。……これが文字反対論者の論拠になっているらしいが、実

は大変なことを忘れている。それは、入学時に読み書きの不十分な子どもと親の立場である。必死になって追いつき、また間に合わせようと努力する

子どもと親の気持ちを考えれば、三年で差がなくなるという、横断的な調査で物をいつてはならないはずである。三歳児でも、自分の持物に名前を書

いてもらっている。シンボルマークもあるが、やはり文字である。母親の記名を見ていて、自分でも書いてみたくなるのが子どもである。なぜ教えてはいけないのであろうか。

もっとも、子どもは教育者の意図をよそに、自分勝手に獲得していく。いまだき、カビのはえた経験論にしがみつく者はいないであろうが、子どもは印画紙ではない。与えられたものを、そのままに刻みつけるほど、教育は低次元のものではない。大人は、高次元

で獲得していく子どもを、もつと理解しなければならぬのである。

さて、子どもに対する誤った考え方に、子どもを完全なものでなければならぬとするのがある。もちろん、発達段階に応じてということであるが、これもおかしいものである。

完全主義者が子どもを見ると、不完全きわまりないものであるから、それを完全にしようというのであろうか。

完全かどうかというの、当然、結果に対する評価である。そこで、不完全な子どもが叱られることになる。完全基準は、いくら子どもにも応じてといつても、大人の側のものである。

そこで、完全を押しつけられた子どもは、大人の承認を得るためにのみ完全を求めようとする。―デキマシタ―。そこで承認されればよいが、不完全を

自認する子どもはどうなるであろうか。―デキナイ―子どもは泣いて逃げることになる。

実際子どもは、やりなおしが下手である。しかし、そこで満足してもいない。次の機会をねらうゆえんでもある。そして、不完全感が次への進歩を約束している。不完全だから、欲求を生ずるのである。

したがって、子どもは不完全でなければならぬのである。恐るべき獲得能力は、その不完全さから発しているからである。そこには、未完全を容認し、過程を楽しむ遊びの活動が存在しよう。このあたりに、幼児教育の原点があるような気がするが……。

(聖徳学園短期大学)